

# 県史跡 中里城遺跡

青森県中泊町中里字亀山 741 ほか

## 1 中里城跡史跡公園について

中里城跡史跡公園は、史跡広場を中心に、芝生広場・遊歩道・展望台・水飲場・東屋・トイレなどを整備した憩いの場です。

中里城遺跡は、津軽山地(中山山脈)より西へ延びる台地上に広がり、遠く岩木山・屏風山・権現崎などを見わたすことができます。台地は3つの部分(区)に分かれ、最も広いI区では昭和63～平成9年(1988～97)にかけて発掘調査が行われました。

その結果、中里城遺跡は縄文時代より現在にいたるまで各時代の人々によって利用され、なかでも平安時代には空壕・土塁・柵列などの諸施設によって区画されたムラがつくられていたことがわかりました。このようなムラを「古代環壕集落」と呼び、北海道南部より東北地方北部にかけて数多く分布することが知られています。史跡広場は、当時の集落の様子を復元したものです。史跡公園部分は、平成15年(2003)保存状態が良好であり、北奥地方における古代の様相を考えるうえで重要な遺跡であるとの理由から県史跡に指定されました。



I区南方に位置するII区は、現在神明宮境内として利用され、江戸末～明治時代にかけて活躍した教育者工藤他山の記念碑などがあります。またI区西方のIII区は旧神明宮跡と伝えられており、現在は甲子塔が祀られています。

中里城跡史跡公園は、郷土の長い歴史が刻まれた遺跡を、恒久的に保存することを前提としています。そのうえで、復元された古代の集落をとおして自然・社会と人々のかかわりについて学習したり、長い年月にわたって地域の人々が中里城遺跡を活用してきたように、新たな地域創造の舞台として開放されています。



## ご利用にあたって

- 1 この史跡公園は、中泊町教育委員会が管理を行っています。
- 2 史跡公園の全部または一部を独占して利用するためには、予め教育委員会の許可が必要です。
- 3 ごみ等については各自持ち帰るようにしましょう。
- 4 水飲場・トイレ・外灯等の施設は、冬期間はご利用になれません。  
\*外灯の点灯時間は、季節によって異なりますのでご注意ください。



史跡公園

中里城跡

■発行■  
中泊町教育委員会  
〒037-0305  
青森県中泊町中里字  
紅葉坂 210  
TEL(0173)69-1112  
FAX(0173)69-1115  
<http://www2.town.nakadomari.aomori.jp/hakubutsukan/>

中泊町教育委員会

### 2 - 古代 - 考古学からみた中里城遺跡

「蝦夷」と古代集落 中里地域の本格的な開発は中近世以降のことですが、その起点は平安時代に遡ります。10世紀初頭、大沢内溜池周辺や、深郷田・宮野沢・五林など、現在の集落が広がる低い台地に、古代集落が続々と出現しました。当時の北奥は国家の管轄外であり、そこに住む人々は「蝦夷」と呼ばれていました。中里地域において古代集落を開いたのも、「蝦夷」と称される人々と考えられます。

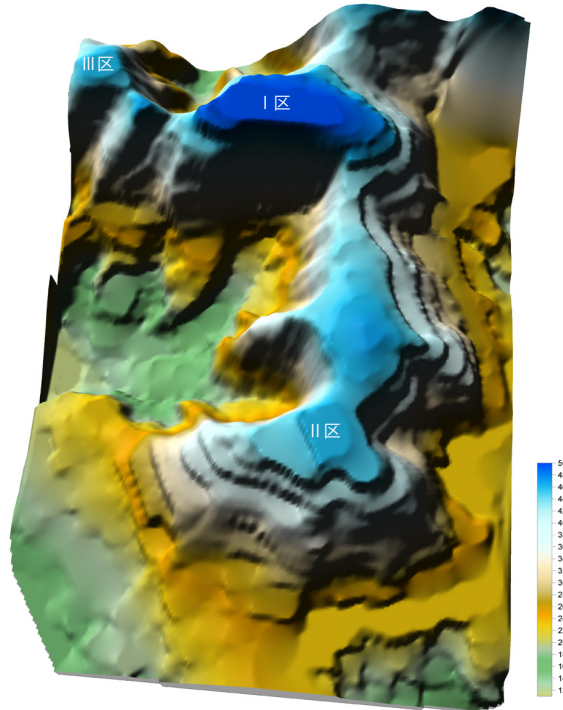


「環壕集落」の出現 古代集落が出現してから約半世紀、10世紀後葉には再び大きな変化が訪れます。低い台地につくられた集落の多くは放棄され、人々は標高30～50メートルの一段高い丘陵部に移住を開始します。高所につくられた集落は、壕や柵で囲まれ、容易に侵入できない構造になっており、「環壕集落」と称されています。稲作や漁撈等の生業に便利な低地から、高地へ移転する動機については、土地・水・交易利権等を巡る「蝦夷」同士の争いとする説が有力ですが、異論も少なくありません。



中里城遺跡の発掘調査 中里地区では、このような古代の「環壕集落」が10ヶ所前後確認されています。なかでも規模・標高ともに卓越し、岩木川下流部を代表するのが、県史跡中里城遺跡です。発掘調査によって、縄文前期・平安・室町・江戸各時代の遺構遺物が発見され、なかでも平安時代が主体を占めることが明らかとなりました。

平安時代の集落は、一時期10棟前後の竪穴建物跡から構成され、全8期にわたる変遷が



推定されますが、後期(10世紀後～11世紀前)には柵列・空壕等の区画施設を伴う「環壕集落」へと変貌を遂げます。竪穴建物群の周囲に廻らされた柵列跡は全長約85m、空壕跡は全長約130m、幅約5m、深さ約3mに達する大規模なものです。

主な出土遺物 在地産の土師器・須恵器に混じって、北海道に起源をもつ擦文土器が大量に出土しました。擦文土器は、北海道南西部と共通する文様構成のものが多いことから、岩木川―十三湖―日本海を介して、北海道との交流が盛んに行われていた様子がうかがわれます。

一方炭化米や靱痕土器、200個以上出土した漁網用土錘の存在は、稲作や内水面漁撈が生業の一端を占めていたことを示します。また羽口・鉄滓・砥石・坩堝など精錬・鍛冶関連遺物や、錫杖状鉄製品をはじめとする各種鉄製品の出土も注目されます。

中里城遺跡を含めた「環壕集落」は、奥州藤原氏が北奥を支配する平安時代後期12世紀までには終焉を迎えます。同集落の消滅は、中世社会の幕開けとともに、中里地域が国家の領域に含まれたことを意味する重要なエピソードといえるでしょう。



空壕跡

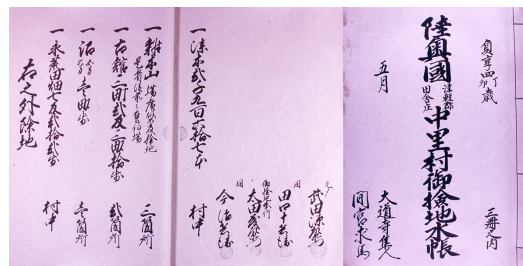


### 3 - 中世 - 歴史上の「中里城」

文献上の中里城 中里地区の中心部に位置する中里城跡は、古くから「館ッコ」「お城ッコ」として伝えられてきたほか、各種の記録類においても「古城」「古館」という記載が見られることから、少なくとも江戸時代前期には城跡として知られていたことがわかります。「陸奥国津軽郡田舎庄中里村御検地水帳」には、「一古館 三町貳反三畝拾歩 貳箇所」との記載があり、免税地として扱われています。

一方同帳に先立つ貞享元年(天和4・1684)に作成された「貞享の絵図」では、ほぼ中央に三重の山が描かれ、「古城」「三拾間貳拾間」(約20アール)と注記されるほか、山裾には「館ノ下」「館ノ腰」などの地名が記されています。

寛政10年(1789)中里を訪れた菅江真澄は、城跡出土の「金飯」を見たことを書き残していますが(「邇辞貴迺波末」)、「封内事実秘苑」においても「法花寺近所之山」から「板金」が見つかり、ここが「舊き城跡」である旨が記されています。なお「津軽大成記」では、「国中城跡考」の項で「中里ノ館」の名をあげ、館主不明の館跡に分類しています。



中里村御検地水帳(弘前市立図書館蔵)

中里城の構造 発掘調査が行なわれたI区平場は、南北に縦走する土塁・空壕によって東西に隔てられています。西側が一段高く、中世の遺物も多く発見されていることから、城の中心部と考えられています。西端からは、十三湊一帯や岩木川下流域一帯を見渡すことができます。なお平場の周囲には、南側の急な崖の部分を除き、1～3段の帯郭が巡らされています。

主郭の西には、帯郭を挟んで小さな郭(Ⅲ区)が続きます。江戸時代末まで神明宮があった地点で、現在も庚申塔や甲子塔が祀られています。昭和23年(1948)ころ、経塚が発見されたのもこのあたりと考えられています。主郭の南側、神明宮の境内から工藤他山記念碑のある地域(Ⅱ区)も城域と推測されます。社殿の後背部が急崖になっているほか、南西部から東部にかけて数段の帯郭が残されており、神明宮の参道も帯郭を利用していると考えられます。

中里城と水運 中里城跡の北側には中里川、南には宮野沢川が流れています。さらに城が利用されていた時代には、「貞享の絵図」に描かれた「福甲田瀉」等の存在から、西側に旧十三湊湿地帯が入り込み、各中里城の三方向を守る役割を果たしていたと考えられます。

宮野沢川や中里川、福甲田瀉あるいは旧内瀉(昭和30年代の干拓事業で大部分消滅)を経て十三湊に至る川筋は、古代から重要な交易ルートであったとともに、安藤氏の十三湊進出に伴い、より重要性を増したと考えられます。中里周辺の中世陶磁器や五林神社の石塔群などもこのルートを進んでもたらされた可能性があります。

中里城と十三湊 中世中里城の存続時期については、五輪塔や宝篋印塔の存在、あるいは出土陶磁器の状況から15世紀ころに利用され、大浦(津軽)為信による津軽統一以前に姿を消し伝説化していたと考えることができます。

安藤氏が藤崎から十三湊に進出したのは13世紀前期のことと考えられ、「十三湊新城記」は正和年中(1312～1317)に新城を築いたと述べています。北条氏の所領を管理するとともに、「蝦夷管領」として北方の支配を委ねられて強い力をもつようになった安藤氏は、14世紀初めに一族間の争いをおこし(津軽大乱)、鎌倉幕府滅亡の遠因をつくるまでに成長していました。室町時代に入ってから安藤氏は十三湊を拠点として日本海で活動を続け、岩木川下流域一帯を支配しましたが、おそらく中里城も安藤氏の影響下にあったと考えられます。

その後同地域では南部氏が勢力を伸張し、安藤氏と対決する姿勢を強めていきました。安藤盛季は娘を南部義政に嫁がせ、姻戚関係を結んで平和を保とうとしましたが、南部氏は突如として安藤氏を攻め、北海道へ追い落とすことに成功しました。「満濟准后日記」はこれを永享4年(1432)のこととし、また「新羅之記録」は退去の時期を嘉吉3年(1443)のこととしています。以降安藤氏と命運を共にするかのよう



貞享の絵図(中泊町博物館蔵)

### 4 史跡整備の経緯

#### 発掘調査の経過と関連調査（昭和63～平成7年）

中里地区の中心部に位置する中里城遺跡は、古くから「館ッコ」「お城ッコ」などと称され、信仰の対象となってきました。中泊町では、昭和60年度（1985）より、同遺跡を対象とした史跡公園整備を企図し、用地買収・整備事業等と並行して、昭和63年（1988）から平成9年（1997）にかけて発掘調査を実施しました。

平場を対象とした平成元年（1989）・2年（1990）度調査では、古代の竪穴建物跡約80軒が発見され、出土遺物からおおよそ10世紀前葉ころ最初の集落が出現し、約100年間余り継続した後、11世紀代の廃絶が推定されました。

平成3年（1991）度には、平場より一段下がった第1段面の試掘が実施され、空壕跡が発見されました。同空壕跡から11世紀代を下限とする遺物が集中的に出土したことから、平場集落との同時存在が想定され、壕で囲まれた集落—いわゆる「環壕集落」として位置づけられるようになりました。

平成4～7年（1992～95）度にかけては、「中里町内遺跡詳細分布調査」「深郷田遺跡範囲確認調査」「中里町館跡基本調査」等関連調査が積極的に実施され、古代における資料の蓄積が急速に進むとともに、公有地部分の町史跡指定、「中里城跡整備検討委員会（村越潔委員長）」発足など、史跡保存・整備計画が進展しました。

#### 整備事業の着手と空壕の発掘調査（平成8～9年）

平成8（1996）年には「中里ものがたりふれあいタウン整備事業—中里城跡整備事業—」として、自治省主管の国庫補助事業に採択され、「中里城跡環境整備基本構想」を基に遊歩道整備・平場の盛土・トイレ・東屋・展望台の建設等史跡整備事業が始まりました。

翌9年度は、駐車場の整備・電気設備工事・植栽工事と併せて「環壕集落」の復元工事が計画されていたため、未調査であった第1段面の事前発掘調査を実施することになりました。

調査は平成9年、平場北東部約400㎡を対象に行われ、その結果平場南東部に続く空壕跡が検出されました。これらの調査成果を基に、竪穴建物跡・柵列跡・井戸跡・空壕跡・土塁跡等復元展示を中心にした整備が進められ、平成9年9月竣工、翌10月に開園を迎えました。

#### 中里城跡公園整備事業一覧

年度	事業名	面積	調査体制
昭和60-62	土地公有化	9,278㎡	
昭和62・63	歴史調査	—	委託
昭和63	試掘調査	(1,104㎡)	中里城跡調査会
平成1	第1次調査	1,295㎡	教育委員会
平成2	第2次調査	1,657㎡	教育委員会
平成3	第3次調査	364㎡	教育委員会
平成4	補遺調査	981㎡	教育委員会
平成5	基本構想(1)	—	委託
	遺物整理	—	教育委員会
	基本構想(2)	—	委託
平成6	基本計画	—	委託
	Ⅱ区試掘調査	64㎡	教育委員会
平成7	実施計画	—	委託
	工事計画	—	委託
平成8	整備工事(1)	13,741㎡	
平成9	空壕跡発掘調査	400㎡	教育委員会
	整備工事(2)		

調査面積合計 5,865㎡



#### 中里城跡公園整備事業概要

事業名称	[若者定住促進緊急プロジェクト] 中里ものがたりふれあいタウン整備事業 (中里城跡史跡公園整備事業)		
所在地	中泊町中里字亀山内		
面積	13,741㎡		
事業費	141,329千円		
事業年度	平成8～9年度		
工事概要	種目等		
施設工	展望台(41.88㎡)	1棟	
	四阿(12.96㎡)	1棟	
	トイレ(9.92㎡)	1棟	
	水飲み場	1ヶ所	
	プロア室	1棟	
	主照明	11ヶ所	
	アプローチライト	17ヶ所	
	散策道延長	339m	
	ロープ柵設置工事	100m	
	階段工(延長86.5m)	4ヶ所	
	駐車場	681㎡	
	案内板	2ヶ所	
	土塁工(2ヶ所)	39.5m	
	空壕工(2ヶ所)	90m	
復元工	柵列工	100m	
	竪穴建物復元工	1棟	
	住居跡復元工	4ヶ所	
	井戸跡復元工	1ヶ所	
	説明板	8ヶ所	
	植栽工	芝生(芝生広場)	2,680㎡
		ヤエザクラ(〃)	13本
		ソメイヨシノ(〃)	14本
		サルスベリ(遺跡展示広場)	3本
		アカシア(〃)	3本
		ミズナラ(〃)	3本
		トチノキ(〃)	3本
		クルミ(〃)	3本
		サツキツツジ(駐車場周辺)	48㎡
マツバギク(〃)		150㎡	

\*着工 平成8年8月27日  
竣工 平成9年9月27日  
開園 平成9年10月1日

■発行■  
中泊町教育委員会  
〒037-0305  
青森県中泊町中里字  
紅葉坂210  
TEL(0173)69-1112  
FAX(0173)69-1115  
http://www2.town.  
nakadomari.aomori.  
jp/hakubutsukan/